LL ニュース

No. 32

March 15, 2006　　愛知大学豊橋語学教育研究室

特集　—世界の大学生事情—



チュラーロンコーン大学文学部（タイ）

かつては、この建物の２階に学部図書室があり、そよ風が華の香りを運ぶ心地よい環境で勉強ができた。
現在はこの建物のほかに高層ビル冷房完備の学部棟があり、ほとんどの授業はそちらで行なわれている。

CONTENTS

◎特集　—世界の大学生事情—
●イギリス大学生事情（三川克俊）…… 2
●韓国の大学生活
—中央大学校民俗学科—（星合亘子）…… 4
●タイの大学ウルルン観察記（加納　寛）…… 7
○英語　e-Learning！…… 9
●アメリカの大学生事情（塚本鋭司）（朝倉政映）… 10
●中国の大学生事情（塩山正純）…… 12
●当世ロシア学生事情（清水伸子）…… 14
●フランスの学校生活（高橋秀雄）…… 16
●ドイツの大学（河合まゆみ）…… 18
◎私の日本語修業時代（トーマス グロース）…… 20
◎LL Tea Time
●春休み･卒業旅行にラオス旅行はいかが？
（谷中珠里）…… 21
●2006年FIFAワールドカップドイツ大会
（森　隆裕）…… 22
◎公開講座「言語」2006プログラム …… 24
◎外国語検定試験奨励金について…… 24
◎ＬＬ自習室を利用しよう！…… 24

イギリス大学生事情

経済学部
三　川　克　俊

イギリスの大学と日本の大学を比較したものに目を通してみると、日本人の書いたもの（ほとんど学者の場合）は、イギリスの大学生は日本の大学生よりよく勉強するとか、イギリスの大学生のほうが日本人の学生よりも精神的に大人だとか、という論調が目立ちます。もちろん、一面は当たっているのですが、こうした意見は必ずしも正しくありません。イギリスという国にあこがれて、かつ英語を上達させたい、という根本的な動機から留学し、学問を修めてきた大学の先生の書いたものは、ほとんどの場合、イギリス礼賛に終始しがちです。もちろん、イギリスの大学はすばらしい点は数多くありますが、一方的にイギリスの大学はパラダイスのようなところである、とステレオタイプを持ってしまうと実際に留学した際に後悔することになりかねません。その点、ある程度客観的な知識を得ておくことは有益だろうと思います。私自身イギリスにほぼ３年間留学しましたが、以下のことはもちろんすべてのイギリスの大学で客観的にあてはまることではないことは理解してください。

１、卒業年数の違い

イギリスの大学は一般に３年で卒業します。教養課程で２年、専門課程で２年、といったような日本の大学とは違います。はじめから専門課程で学習します。というより、高校の段階ですでに科目を３科目ぐらいに絞って勉強するために、高校卒業時点で大学の一般教養レベルはマスターしており、またマスターしておかないと大学でついていけないのです。ちなみにイギリスの大学進学率は現在約４３％ほどです。日本は短大を含めほぼ５０％です。

２、キャンパスの違い

キャンパスは日本の大学と同じように都心にある大学は（オックスフォードやケンブリッジを除く）、ひろいキャンパスを持たず、都会のビルの中にある建物を移動するという感じです。他方、郊外にある大学は比較的広大なキャンパスを持ち（私がいたレディング大学がそうでした）、キャンパス内にある寮と自分の所属する学部との往復という毎日になります。イギリスの大学には日本の大学と同じように生協があり、"student union" と呼ばれています。日本の大学と大きく異なるところは、お酒が飲めるパブが生協の中にあるということです。もちろん授業時間中も営業しています。酔っ払って授業に参加する学生はあまり見たことがありませんが、授業の後（あるいは前も？）でビールを楽しみながら友人と語り合ったりすることはあります。それだけイギリスの大学生は大人とみなされているとうことでしょうか。しかし、ゲームセンターのようなゲームコーナーなどもあるので（大学によって異なるかもしれません）、この点は一般に大学にゲームコーナーを持たない日本の大学生のほうが大人だといえるでしょう。

３、寮生活について

イギリスの大学１年生は原則として全員寮生活が義務付けられます。イギリスの寮は"Hall of Residence"と呼ばれ、アメリカ式の"dormitory"とは普通呼ばれていません(もちろん通じますが)。寮は大別して食事つき（"catered hall"という）と自炊（"self-catering"という）に分かれます。もちろん、寮によって違い、同じ寮で建物別に区別がある場合もあります。学期中は食事が出るほうが便利かもしれませんが、イギリスの食事にどうしても慣れない人にはツライかもしれません。朝食はシリアルかトーストに果物、昼食は様々で（授業があるため、キャンパス内の学生食堂で済ませる学生が多い）、授業時間に合わせて寮で食べる学生とそうでない学生がいるようです。私のいた寮では前日に頼んでおくと、昼

に寮で食べられない人にはキャンパスへ持っていくサンドイッチを作ってくれました。夕食も時間が決まっていて、夜の７時半を過ぎると食事にありつけない、などもありえます。ベジタリアンに配慮してベジタリアン用のメニューも用意してある場合があります。宗教上の理由など肉が食べられない人に配慮がしてあるようです。配膳のおばさんなどは結構、学生の顔を記憶していて、ベジタリアン用のメニューほうがおいしそうな場合に、ベジタリアンでもないのにベジタリアン用のお皿を取ったりすると注意されます（私も注意されました）。とにかく、メニューは大学や寮によって異なるので一概に言えませんが、実際に食べてみなければ美味しいかどうかは個人の味覚の問題なので、アドバイスはできません。ジャガイモ（フライドポテトや蒸かしたもの）がパンのほかによく出ることは覚えておくのがよいでしょう。ちなみに土日の夕食は原則として出ません。また、寮によって異なりますが、寮内に小さなパブがあるところもあります。

自炊寮は建物が別の場合が多いですが、大学院生など、ある程度自炊に慣れた人にとってはいいでしょう。食事つきの寮は学部１年生が大半で、一般的に夜が非常に騒がしいからです。学部生はほとんどの場合、食事付を選びます。自炊寮においては、キッチンは比較的設備が整っています。しかし、これも大学や寮によって異なります。

食事つきの寮にも共同キッチンはありますが、覚えておいたほうがいいのは、冷蔵庫やキッチンのものがよく盗まれるということです。比較的少人数の人しか入れないようにないっている寮であるならばさほど心配はいらないのですが、大人数の食事付の寮にある共同の冷蔵庫などはよく盗難に遭います。私もビールやワインを冷やしておいたのをよく盗まれました。牛乳さえ盗まれます！あるイギリス人学生から聞いた話ですが、飲みかけの高価なワインを盗まれたのが悔しくて、犯人を懲らしめるためにワインの空き瓶に自分のおしっこを入れて冷蔵庫へ入れておいたそうです。その翌日、見事にその美味しい（！）ワインの瓶はなくなっていたそうです。

寮の部屋のタイプも寮によって異なります。シャワーやトイレが自室についている部屋もあれば、洗面台もなにも付いていない共同の部屋もあります。床の掃除や、ベッドのシーツなどは２週間に１度取り替えてくれます。長期休暇中は、ほとんどのイギリス人は実家に帰ったり、長期の旅行へでかけたり、アルバイトに励んだりするため、寮は静かになります。その間、寮に残る留学生などは部屋を移動させられたりします。そのため、あまりに大量の荷物がある人は休みのたびの移動に辟易します。

２年次以降になるとほとんどの学生はこうした寮生活から脱出して、１年生のときにできた仲のよい友人たちとアパート（イギリスではフラットといいます）や貸家を共同で借りて生活を始めます。日本人が学生同士で部屋をシェアして借りるのは少ないでしょうが、イギリス人にとってはこれが普通のようです。

４．授業などの違い

イギリスの大学は２学期制のセメスターではなく、３学期制です。学年の始まりは10月で、クリスマスまでに秋学期（"Autumn term"）が終り、新年明けに春学期（"Lent term"といいます）がはじまり、イースターまで続き、その後夏学期（"Summer term"）が６月まで続きます。イギリスの大学の授業時間は日本の大学と違い原則として一コマ60分です。50分程度のところもあります。少人数で受けるクラスもあれば、大教室で何百人が講義を受けるクラスもあります。教官や授業によって異なりますが、自由に討論や発表をさせるセミナー形式の授業もあれば、講義だけの授業もあります。個別指導のチュートリアルもあります。試験ももちろんありますが、レポートが多く大変です。図書館は充実していて、大学によっては夜間の安全のために図書館から寮までバスを運行しているところもあります。

イギリスの大学は、以前はイギリス人にとっては授業料がタダでした（もちろん留学生はしっかり払わなくてはなりません）。税金でまかなわれていたのです。現在ではイギリス人でも年間20万円ほど個人が負担しなければなりません。日本からの留学

生の授業料は、大学によって異なりますが、文科系で年間最低約６千ポンド（約120万円）以上かかります。理系はもっとかかります。ヨーロッパからの留学生などはEU内で互いに契約を結んでいるためにもっと安いようです。

５．アルバイト事情などの違い

イギリスの大学生は基本的に学期中はアルバイトをしていません。親からの仕送りだけで生活しています。日本の大学生はほとんどの人が学期中何かしらのアルバイトしているのと対照的です。これは学期中は勉強が忙しくてアルバイトなどをする時間的余裕がないからです。それゆえ、一般的に言ってイギリスの大学生は貧乏です。ブランド物なども当然持っていません。女子学生なども普段はほとんどおしゃれなどしていません。夏休みなどの長期休暇中に集中してアルバイトをしてお金を貯めているのです。

６．留学生とイギリス人学生―交流のなさ

これは一般的にどこのイギリスの大学でもそうでしょうが、留学生とイギリス人学生の交流があまり見られないことです。寮での食事中もイギリス人同士で固まって座ってしまい、留学生と積極的に交流しようという光景はあまり見られません。留学生が英語が不自由なせいもあるでしょうが、イギリスの大学生はそういう面であまりフレンドリーではないようです。もちろん、こちらが積極的に話しかけたりすれば親切にしてくれますが、こういう点は日本人と似ているかもしれません。愛知大学でもよく食堂で外国人留学生同士で固まって座っているのをよく目にしますが、まわりの愛大生は留学生に積極的に話しかけようとはしないようです。「留学生に日本語を教えてあげる代わりに、彼らから外国語を学べばいいのに」と思っているのは私だけでしょうか？

韓国の大学生活
― 中央大学校民俗学科―

国際コミュニケーション研究科
星　合　亘　子

熱心な家庭では就学前から習い事で忙しく、中学・高校にもなると夜遅くまで学校や塾でひたすら勉強し続ける韓国の子供たちですが、その目標はまず、ソウル市内の有名大学に入ることだといわれます。地方の国立大よりもソウルの無名大学に入ったほうが就職に有利なのだそうで、狭き門を目指しての受験戦争が繰り広げられるのは皆さんもご存知の通りです。ソウル大学や延世大学などトップクラスの大学の人気は相変わらずですが、最近ではＫＡＩＳＴ(韓国科学技術院)やＰＯＳＴＥＣＨ(浦項工科大学校)といった科学技術系の大学も、韓国の半導体産業の躍進などから注目されています。

愛知大学から毎年交換留学生が派遣される中央大学校は、ソウル市内にある私立の総合大学です。中央日報の大学評価でも上位にランクされており、安城キャンパスにある演劇学科には多くの芸能人が在学していることでも有名です。今回は、私も含め国際コミュニケーション学部比較文化学科の学生たちがこれまで数名在籍した文科大学（大学は日本の学部）民俗学科の、とくに学科を中心として行われる行事について、同学科の卒業生である宋知玲さんの話と合わせてご紹介したいと思います。

韓国の新学期は３月から始まります。新学期が始まってまず行われるのはＭＴです。ＭＴとはMembership Trainingの略でいわゆる合宿。民俗学科ではほかに２学期の初めに学科全体のＭＴがあり、それ以外にも学年別やそれぞれのサークル別などで、頻繁に行われます。キャンプや自炊をしたり、朝まで語り合ったりするのは日本の大学生の合宿も同じですが、学生の主導で、教授陣も一緒に学科全体が参加するＭＴは韓国の大学独特のものかもしれません。

ＭＴに参加すれば学科全体の構造を把握し親睦を深めることができるため、上下関係が厳しく団結力の強い韓国社会では必要不可欠な通過儀礼なのかもしれません。

ＭＴをはじめ学科で行われるさまざまな行事を統括するのが学生会です。選挙で選ばれた会長を筆頭に、企画部、総務部、踏査部などの各部長、学年代表と副代表によって組織され、学生会則に則って運営されています。民俗学科の場合、各学生は10万ウォン（４年間分）の会費を納め、総務部がそれを管理して予算を立てていきます。学生自らが学科全体を組織化し、行事などを企画管理する点も日本の大学とは違うところでしょう。

民俗学科はその名の通り、民俗学を中心に学べる韓国でも数少ない学科の一つです。なかでも民俗学の研究には欠かせない踏査(フィールドワーク)には力を入れており、学科全体で行う定期踏査は年に２回、３泊４日ほどの日程で国内で行われます。村落や祭りなどをいくつかの班に別れて分野別に調査し、後に発表会を行います。また夏休みには海外踏査を企画し、これまでにモンゴル、中国の朝鮮族村落、日本では京都や愛知県の佐久島、長崎県対馬島を訪れています。これら学科主催の踏査のほかにも、学生たちはそれぞれのテーマに沿って個別に踏査を行いますが、カリキュラムの一貫として民俗調査の経験を多く積むことができるのはうらやましい限りです。



写真２'ﾀﾙﾘ'の公演（http://www.caufolk.co.kr/）

民俗学科には ･･･ ･･･ ･･･



写真３　卒業写真の撮影
（http://www.cyworld.com/dugoolee）

卒業式は２月ですが、卒業写真は早くも５月と９月に撮影します。撮影は学科別に行われ、写真３のような学士帽とマント姿の個人写真や、先生も参加しての集合写真を撮ります。まだ卒業論文も書いてないであろう時期に卒業写真の準備をするのは気が早いような気もしますが、２月に卒業しないつもりの学生も同期の友達と一緒の写真を残したいため、このときの撮影に参加するそうです。

男子学生の悩みは、やはり何といっても兵役でしょう。多くの学生が在学中に休学届けを出して入隊します。在学中に入隊するのは大学を卒業してからでは就職が困難だったりと、いろいろな理由があるそうですが、除隊して大学に戻ると一緒に入学した女子学生はもう社会人になり、かつての後輩が自分よりも上の学年にいたりすることになります。キャンパスを歩いていても、入隊前の学生と除隊後の学生では、大人と子供ほど‘風格’の差が歴然としています。大学生活にも慣れ、友人や彼女もできた絶頂期に、世俗から離れ厳しい訓練に耐えながら、約２年ものあいだ特殊な環境に置かれてさまざまな経験を積むことで、自分の将来について考えることも多いとか。銃の使い方だけでなく、韓国社会で生きていく術を学ぶという軍隊での経験も含めた７年ほどの長い大学生活を、男子学生は送るわけです。

全国371の大学中、就業率１位を誇る中央大学校ですが（http://news.kbs.co.kr/article/news9/200509/20/050930/781267.html）、民俗学科の学生たちが、その専門性を生かして就職するのは大変難しい状況です。在学中から博物館などでアルバイトをする学生もいますが、日本と同じく就職するのは至難の業で、ほとんどが民俗学とは関係のない企業に就職をしているようです。進学した学生は2002年に一回生が卒業して以降2005年度までに８名で、他大学の民俗学や人類学専攻の大学院や海外留学に行っています。しかし、2006年度からは中央大学校の国文科に民俗学専攻の修・博士課程ができるため、今後は進学して専門的な研究を続ける学生がさらに増えることと思います。

このような韓国の大学生活は、交換留学制度で１年中央大学校に在籍することによって直接目にし、体験できることばかりです。興味があるならば、一度交換留学試験に挑戦してみてはいかがでしょうか。

・参考ホームページ

＜韓国の大学別就職率＞

順位	大　学　名	就　職　率（%）
1	KAIST	97
2	POSTECH	96.6
3	中央大学	94
4	成均館大学	92.2
4	漢陽大学（ソウル）	92.2
6	亜洲大学	90.7
7	釜山大学	89.8
8	西江大学	89.7
9	高麗大学	88.8
10	蔚山大学	85

（中央日報「2005　全国大学評価」から引用
http://news.joins.com/society/200510/07/
200510070457359431300030103011.html）

中央大学校 http://www.cau.ac.kr/

中央大学校民俗学科　http://www.caufolk.co.kr/

中央日報「2005全国大学評価」

http:/news.joins.com/series/education/200510/4158/

タイの大学
ウルルン観察記

国際コミュニケーション学部
加　納　　寛

（１）同じところ

タイの大学、行ったことあります？　ちょっとのぞいてみましょう。門の辺りには警備のおじさんが大量にいますが、あなたに噛みついたりはしません（捕まえるかもしれないけど）。ただ、身だしなみには気をつけてね。きょうびの日本人旅行者にありがちな、いつ洗ったかわからんような半ズボンに襟なしTシャツ、サンダル姿では、大学に行くにはあまりにも失礼です。また、部外者が入ってはいけないところに入ることのないように。

さて、のぞいてみるとどうでしょう？　基本的な部分は何も日本と変わりません。若い人があちらこちらにいて、勉強したり、学問したり、研究したりしています（ここまで読んで、正直なところ自分の大学と全然違うと思った人は、もう一度自分の大学の看板を確かめてみましょう。ちゃんと「・・大学」って書いてありますか？　実は「・・幼稚園」とか書いてあったりして）。

（２）違うところ

でも、日本の大学と大きく違う点もあります。

まず日本の大学と大きく違うのは、タイの大学には制服があることです。一般に、女性学生は、白の半そでブラウスに黒のスカート、男性学生は白の長袖シャツに黒の長ズボンが制服の基本です。これに、校章バッジを着用します。当然、これらを端正に着こなさなければなりません。服の裾をだらしなく出していたりするような者は、大学では相手にされません（高校生までは、服の裾をだらしなく出して「不良」を装うガキはよくいます。半ズボンだけど･･･）。どちらにせよ、大学まで来て「不良」を装うバカは、タイにはあまりいません。この点、日本の大学生はかなり幼稚に見えます。

卒業式のときなどには、来賓、教官から卒業生にいたるまで、色とりどりのガウンを着用します。ガウンの色や柄は、卒業校や学部、学位によって違います。日本の大学にはガウン着用の習慣はありませんが、外国に行ったときには寂しいですね。

タイの国立大学の卒業式には、国王や高位の王族が必ず臨席し、卒業生一人ひとりに直接卒業証書を手渡すことになっています。卒業生にとっては一生に一回のことですからよいのですが、王族は一人で一回に何千枚も手渡すのですからたいへんです。よく腱鞘炎にならないものです。タイの大学生や大学卒業者は、その瞬間を最高に名誉な瞬間だと考えています。大学出身者のオフィスや自宅の壁をよく見ると、卒業証書授与の瞬間写真がよく飾られています。言い換えれば、タイの大学卒業者というのは、タイという国家の頂点を支えるエリートであるということです。皆さんの卒業証書（学位記）、誰から手渡される（た）のかな？

（３）大学の一日

タイの大学の朝は８時に始まります。８時になると大学中に国歌が鳴り響き、国旗掲揚塔に国旗がスルスルッと上ります。当然ですが、この時には、大学にいる者は直立不動の姿勢で国旗に注目しなければなりません。こういう習慣のない読者は、タイに行ったら十分に注意しましょう。とにかく、周りのみんなが急に起立して不動の姿勢をとったら、訳はわからずとも同じ行動をとることです。ここでフテクサレていると、下手すると逮捕される場合もあります。

郊外居住者が多く交通渋滞が激しいバンコクでは、８時に大学に到着するためには、６時には家を出ないといけないことも珍しくありません。バスが1時間以上同じ場所から動かないということもザラだったので、たいへんでした。今では、渋滞に左右されない「スカイ・トレイン」や地下鉄も走るようになったので、ずいぶん楽になりました（バスより高いけど）。

授業の合間には、図書室で調べ物をしたり宿題をしたりします。私の留学していた学部の図書室は古い立派な建物の2階にありましたが、窓から風がスーッと通り、花の香りを運んでくるので、とてもよい気分で勉強できました。今では、教室も図書室も冷房完備の高層建物になってしまいました。すこし残念です。

図書室や図書館では、コピーをとることも多いわけですが、コピーはセルフ･サービスではありません。コピー係のお姉さんやお兄さんがコピー機の前（後ろかな？）に待ち構えています。彼らは職人ですから、コピーの鮮明度はトモカク、仕事はとても速いです。30頁コピーする場合には、迷わずコピーの連写ボタンを押して30枚に設定します。このボタンは、本来同じ頁を何枚もコピーするのに使うために開発されたのだと思いますが、彼らの熱い職人魂は、そんな当たり前のなまっちょろい目的などは8.9倍ほど（当社比）軽～く超越してしまいます。コピー機の光源が動くのにあわせて、目にもとまらぬ早業で頁をめくっていくのです。この際、時々不鮮明なコピーが出てしまうのは大目に見ましょう。また時々数ページとんでしまうのも、熱い職人魂に比べれば、とても小さな問題です（何か大切なことを忘れている気がする･･･）。

昼になると、食堂に行って昼食をとります。食堂は、ほとんどの建物・学部に1個ずつあります。料理別にブースが並んでいるので、自分の食べたい料理のブースに行ってセルフ･サービス式に注文します。麺類とカレー類、飲み物・デザート類のブースは、どこの食堂にも必ずあります。どの料理も、（私にとっては）とてもおいしく、また民間で食べるより若干安くなっています。一食、40円ほどです（ジュース代含む）。

食後はベンチで休憩もいいですね。次の授業や課題のために体力と精神力を充実させておきます。風を感じながら行きかう人や犬を眺めながらベンチに腰をおろしている時間は、とても贅沢な時間です。腰掛けるのに飽きたら、散歩しましょう。大学創設者や偉人の像に花や線香を手向けに行くのもよいでしょう。よい成績がとれますように。

さて、授業も終わって夕方になると、あちらこちらでサッカーが始まります。サッカーはどこでも気軽に楽しめる、タイ人の大好きなスポーツです。ジョギングを始める人もいます。

16時ごろになると教官や事務官も次第に消えていきます。自分の子供たちを学校に迎えに行かなければなりませんから。一般に、都心にある名門小中高校は、親の送迎が当たり前なのです（だから大学の朝も日本の大学より早いのだと思います）。この頃から夕方のラッシュアワーの始まりです。できればこの時間の前に下校するのが渋滞に巻き込まれないコツですが、なかなかそうもいかないのが辛いところです。

夕焼けが大学内の池を染める頃、18時になると国旗降下の国歌が鳴り響きます。朝同様に直立不動でスルスルッと下りていく国旗を見送らなければなりません。寮や下宿に住む学生たち、近所に住む教職員たちは、大学の食堂で軽く夕食をとったりもします。このあたりから、大学は静まりかえっていきます（理系学部も、必ずしも不夜城ではありません）。



大学生の制服ポスター
（愛知大学の提携校ナレースワン大学の場合）

日本の大学では、学生がバイトに向けて動き出す頃ですが、タイの学生でバイトをする者はほとんどいません。学業が本業のわけですから、そんなことをしている暇はないのです。バイトですむような単純労働ではたいした金額を稼ぐことはできません。また、タイでは大学卒業者がそれ以下の学歴の人たちと肩を並べて仕事するようなことはありません。大学を卒業して会社や官庁に入ればいきなり高給取りの管理職です。今はとりあえず学業に打ち込んで、卒業したら高給取りになってガッポリ稼ぐのが「正しい」稼ぎ方です。バイトで稼ぐわずかな金のために成績を落としたりしてまともな就職ができなくなれば、長期的にはとても大きな損失になってしまいます。

ということで、夕方から夜にかけて、当然、勉強したり学問したり研究したりします（とても楽しい生活です）。場合によっては（宿題があまりないときや金曜日など）、息抜きに友達と買い物に行ったり、映画を見に行ったり、語り合ったりもします。洗濯したり水を浴びたりもしなければなりません（タイ人は一日に何回も水浴びをします）。こうして夜は更けていくのでした。（しまった、ウルルンする暇がなかった!!）

英語　e-Learning！

学内のパソコンで、英語 e-Learning教材 "ALC NetAcademy"が利用できます。積極的に活用して語学力アップを目指しましょう。

❑　使用できるパソコンは学内に設置の教育用のものです。名古屋校舎・車道校舎からも利用できます。（学外からは利用不可。）

❑　次の２コースがあります。

⑴　スタンダードコース

５段階のステップ学習で、全100ユニットのリーディング、リスニングを多角的に学習。またTOEIC® テストに準拠した10ユニットの模試で実践力をつけます。

⑵　初級・中級者のためのTOEIC® テストスコアアップコース

スタンダードコースよりも難易度が低めのコース。英語学習の初級・中級者を対象にした日常的、実践的なトピックスでTOEIC® テストスコアアップを目指します。

❑　学習を始めるには「利用申請」が必要です。

提出先：　LL自習室（３号館１階　）

ログインに必要なアカウントとパスワードを発行します。

※料金は必要ありません。

豊橋語学教育研究室

アメリカの大学生事情

国際コミュニケーション学部
塚　本　鋭　司

国際コミュニケーション学部４年
朝　倉　政　映

アメリカの大学生は、日本の大学生よりも年齢や人種が多様化していて、一般論として論じることは難しい。しかし、私の合計約８年にわたるアメリカでの留学生活を振り返ってみると、アメリカの大学生の生活にはある一定の規則性があるように思う。平日は大学の授業とそれの予習、復習で、結構遅くまで図書館などで勉強する姿を見かける。私が留学していたニューヨーク州にあるシラキュース大学では図書館が平日は午前０時まで開いていたので、結構多くの学生が図書館で勉強していた。また試験週間が近づくと、図書館の一階のスタディー・ラウンジは２４時間解放されるので、深夜の２時、３時でも勉強している学生がいた。このように平日はしっかりと勉強する学生は多いが、金曜日の午後から学生は週末気分となり、特に金曜日と土曜日の夜はバーや寮、アパートで友達と騒いだりする。これがアメリカの大学生の一週間の生活パターンではないかと思う。

私のゼミ生で、愛知大学の交換留学生としてハワイ大学へ留学していた朝倉政映さんに、ハワイ大学の学生の生活を日本人学生の視点から分析してもらった。彼女が書いていることは、ハワイ大学のみならず、私が留学していたイリノイ州の西イリノイ大学やシラキュース大学の学生にも十分当てはまると思う。以下が彼女に書いてもらった文章である。

私は2004年8月からアメリカのハワイ大学で交換留学生として１０ヶ月を過ごした。日本での学生生活に慣れ過ぎて、それが当たり前のように過ごしていた私にとってアメリカでの学生生活、現地学生との接触はとても刺激的なものだった。日本の常識や感覚と違いすぎて驚かされることが多かったが同時に学ぶことも多く、国に寄ってこんなにも学生事情に色があるのだと感心した。今日はアメリカでの大学生活を通して発見した日本の学生との違いをいくつかのポイントに絞って紹介してみようと思う。

まずは大学での講義である。最初に受けたのはHawaiian Studiesというハワイの文化やコミュニティを形成している民族や歴史についての知識・見解を深める講義だった。講義のスタイルとしてはグループでのリサーチやディスカッションで主に構成されていて、授業は教師よりも学生が主体となって行われていくものだ。受講した感想は一言で言うと、アメリカ人学生のモチベーションの高さに圧倒されたということである。国民性もあるのかもしれないが、授業中生徒は競って発言し、自分がどう考えているか、そしてそれをいかに他の学生に解かってもらうかなど、自己主張の場をとても大切にしている。自分から積極的に発言し、ディスカッションやリサーチに参加していかないと、成績の評価が上がらないのは言うまでもなく、あっという間にクラスで取り残されてしまう。授業初日は気が付けば一人教室に残され、リサーチをするグループにも加われずに終わってしまったのだ。当たり前なのだが、授業の総ての行程は英語で行われるので、自分自身が英語を十分に聞き取れないこと、ほかの生徒よりもハンディがあることにとてもコンプレックスを感じていた。けれどアメリカでは、それは単なる留学生としての言い訳に過ぎず、やはり自分の意見を主張することの大切さや、疑問に思ったことを恥ずかしがらずに徹底的に追求する姿勢が求められる。そうでなければ、授業で取り残されてしまうのだから。私にとってショックだったのは、日本の学生との違いだ。圧倒的にアメリカの学生のほうが大学の授業に意味を見出し、学ぶ姿勢を徹底している気がする。

次に、ハウジングである。日本では一人暮らししているのは主に地方から親元を離れている学生であろう。私も含めて日本の学生の大半は、両親と一緒に暮らし、そこから通っている学生である。アメリカでの学生生活においては、前期は学生寮に滞在し、後期は一つの家を友達4人でシェアリングしていたのだが、そこで知り合ったルームメイトはみな、アメリカ本土から出てきて一人暮らしをせざるを得な

いという条件の学生ばかりではなかった。というのは大学から近いところに両親の家があってもわざわざ家をでて寮に入ったり、友達と家を借りて住んでいるという学生がほとんどだったからだ。その事情に、日本の学生とアメリカの学生の自立という意識において大きな差があるのだと感じた。アメリカでは、大学生になったら親元を自立して一人で暮らすというのが一種の儀式だそうだ。バイトをしながら寮費を納めている学生も多かった。両親も高校卒業と同時に子離れをし、あまり子供の生活に干渉しなくなるらしい。日本の学生の現状との違いに驚かされた。学費も食費もすべて両親に頼っている私にとって、その内情をアメリカ人の友達に話すのは恥ずかしいことのようにも感じた。

もう一つ、日本では聞きなれないのがシェアリングということであると思う。住む場所をルームメイトと共有して生活をともにするのだ。学校の掲示板にもルームメイト募集中のチラシはたくさん見かけられる。アメリカの大学生はみな一人暮らしをするので安いコストで抑えられるシェアリングはとても一般的だ。けれど日本ではルームメイトとシェアして住んでいる学生などなかなか見かけない。なぜなら、みんな親の仕送りで十分一人でアパートを借りられるからだ。初めてのルームメイト、他人との共同生活に緊張しながらも寮での生活はとても楽しかった。生活習慣の違いに意見が対立することもあったが、身近にアメリカ人学生がどんな生活を送っているか知ることができ、私自身とても学ぶことが多かった。プライバシーを妨害されたり、掃除の分配や部屋での規則など苦労することも多いが、共同生活の中で社会に求められる協調性を養ったり、助け合ったりする精神を培っていけることが寮生活の利点だろう。

最後に、アメリカの学生と日本の学生の大きな違いがファッションではないかと思う。ファッションの違いというよりは、他人の目を常に意識する日本人と個性を尊重するアメリカ人の意識の違いなのかもしれない。日本の大学では毎朝、何を着ていこうかいつも迷っていた。着るものをどうしようか迷うくらい、日本人の意識がいつも他人からの視点にあるということだ。現在、日本に留学しているアメリカ人の友達は、日本の大学は毎日がファッションショーだと皮肉っぽく話していた。日本の学生はみなおしゃれだが、いつもみんな同じスタイルで個性がないとも言っていた。アメリカ人留学生の目には日本の学生はおしゃれにばかり気をまわして勉強にはあまり熱心ではないとも映っているらしい。確かにそうである。なぜならアメリカ人の学生は大学に勉強しに行くのに、何を着て行こうかなんて悩まないからである。何を着ていようと誰も咎めないし、気にする人もいない。私のルームメイトは朝起きてすぐパジャマのままで学校に行っていたりしたものだ。私にとってとても新鮮だったことは、学生がスケボーやローラーブレートで登校したり、ハロウィンには思い思いのコスチューム、クリスマスにはサンタクロースの帽子をかぶって授業を受けているのを目にしたことだ。アメリカの学生はみんな個性があって本当におもしろい！学生同士がそれぞれの個性を尊重し合っているし、みんな同じじゃつまらないという意識さえあるようだ。日本の学生も学ぶべき点ではないだろうか。実は私もクリスマスシーズンには喜んでサンタクロースの帽子をかぶって学校へ行った学生の一人である。

これらが、私がアメリカで学生生活を送る上で発見した違いである。アメリカと日本の学生事情に多くの違いを認識し、それらの経験から得たものも多かった。それは自国の文化や歴史の見直すということである。ハワイは日本、その他アジアの国々の文化が混在し、互いへの敬意を忘れずにコミュニティが成り立っている。当然、日系住民も多く学内には日本の言語、文化に興味のある学生がたくさんいて、時にその学生たちのほうが日本人よりも日本の古典芸能や文化・慣わしなどを熟知していたりした。もちろん、彼らは自国アメリカの歴史についても大変詳しいのだが、私はというと日本の文化や歴史について質問されても詳しく説明できないことを恥ずかしく思った。改めて自分の国民性や文化をもっときちんと知っておきたいと刺激されたことが大きな意識改革だった。そして彼らのように自分の国民性、誇りやプライドといったものをもう少し意識する必要がある。異文化を体験することで、学ぶものは計り知れない。国によって違いはあるが、甲乙をつけて判断するのではなく、常に見習うべきことを吸収して､自分の意識や行動に取り入れていけたらと思う。

中国の大学生事情

国際コミュニケーション学部
塩　山　正　純

かつて中国の大学生は「超」エリートで、人口13億の大国を背負って立つ人材の集団というイメージがあった。しかし、最近は学生数が劇的に増え、状況が変わりつつあるようだ。様々な報道や、筆者自身の経験などから、中国の大学生事情について、昔と変らないところ、様変わりしつつあるところをそれぞれ紹介してみよう。

訪れると誰もが実感するが、中国の大学はとてつもなく大きく、キャンパスには教室棟、図書館、グラウンドから、学生寮、教職員住宅、小中高校、病院、銭湯、商店、食堂まであらゆる施設が揃い、一大コミュニティーを形成している。

学生は基本的に全寮制で、学生寮は６～10人くらいで１部屋である。個人の空間は二段ベッドの１段だけで、教科書や書籍、勉強道具から、衣類、日用品、洗面用具まで身体と一緒にこのスペースに納めねばならない。現在では、ひとりっ子世代の大学生が、プライバシーの無い寮生活に馴染めないケースが多いようだ。キャンパスライフは教室と寮との往復が中心で、早朝はラジオ体操や、外国語の暗唱に励む学生も多い。昼間は授業、夜は家庭教師やファーストフード店などのアルバイトに励む。年頃なので恋愛もするが、個人の自由空間がないので、デートは公園や街をぶらぶらするのが主流のようである。こういった基本的な生活スタイルや気質は現在もさほど変化していない。

では、何が以前と違ってきたのか。まず数の面でエリートとは言えなくなってきた。1999年から大学の定員拡大が始まり、政府の発表では2003年末に学生総数が1600万人に増え、東京都の人口より多い人数が大学で学んでいる。約10年で定員が３倍、進学率は19％になり、2010年には2700万人に達すると予測されている。ちなみに通信制にも一般の会社員から軍人まで幅広い層が約250万人在籍して学んでいる。

気質の面では、『中国青年報』の調査によると、大学生のインターネット利用が日常化し、本来読書に使うべき時間が蝕まれている。オンラインゲームやチャットにハマり、毎日利用する学生も少なくない。キャンパスや学生街のネットカフェが、連日ネットやメールを楽しむ学生たちで繁盛している。本来学生の本分である読書に充てるべき時間が目減りし、１学期（半年）の本代は50元（約800円）を下回り、ほとんど本を買わない、読まない学生もいるらしいから驚きである。これは何も日本の学生に限ったことではなかったようだ。

都市と地方の出身地による差も見逃せない。教育費の負担は重くなるばかりで、半期の総額が１人あたり４千元、夏冬の休暇も含めると年間で約１万元にもなる。ある調査では、大学生を抱える家庭の８割が１万元が限度と答えているから、ギリギリの線で子どもの勉学を支えている。奨学金制度が充実していないので、多くの学生は家庭からの仕送りに頼っているが、額が十分でなく、学業の合間に働かざるを得ない勤労学生も少なくない。このような学生は地方出身者に多く、来学期の学費を工面するために休暇中も帰省せず、寮に残って働くようである。アルバイトに時間を取られて、学業にもマイナスの影響があり、地方出身者のおかれている情況はかなり厳しい。



南開大学の学生寮（本科生）と自転車置場

都市部出身の学生は両親が裕福なことが多く、おおむね不自由ない生活をしている。学費や生活費、娯楽費など家族への依頼度が非常に高い反面、独立した生活や空間への憧れがつよく、アパートの一室を借りて自分だけの空間を持つのが理想である。個性を意識する傾向も年々強まり、他人とはひと味違った持ち物やブランドを欲しがったりする。このように、地方出身の苦学生と都市出身の裕福な学生との間で、ひと昔前ならあり得なかった経済面での格差が生まれ、二極化していると言える。

文化面では、京劇や書画など伝統文化を、よく知らないし、関心もない学生が少なくない。すきな音楽は洋楽のポップス、映画もハリウッド、というように嗜好が明らかに西洋に向いている。寮生活でテレビはあまり観られないが、インターネットから情報が簡単に手に入るし、ＶＣＤで外国の映画やドラマも観られるので、外国の流行には驚くほど詳しい。

中国の大学生「３種の神器」と言えば、ひと昔前は「ラジオ・ヘッドホンステレオ・ポケットベル」が相場だったが、現在では「パソコン・ＭＰ３・携帯電話」になった。パソコンは趣味だけでなく、文書作成や表計算のスキルをつけて将来の就職に役立てる実用的な目的もある。裕福な学生は自分専用の１台を持っているが、お金のない学生でも数人でお金を出し合って買ったパソコンを寮で共有し、卒業時に下級生に下取りしてもらうシステムを取っている。ノート型が理想だが値段が高く、実際は値段の安いデスクトップを買っているようだ。ＭＰ３は音楽をネットから直接安価にダウンロードでき、ＣＤを買うよりはるかに安く楽しめるので、お手軽感が受けて流行している。携帯電話は、市場の激しい価格競争のおかげで、大学生でもお小遣いを貯めれば手に入る程度にまで値段が下がった。すでに持っている学生と、買う予定がある学生を合わせると８割に達し、憧れの「３種の神器」というより、すでに大学生の必須アイテムになっている。

大学生の憧れの職業ベスト３は実業家・政治家・研究者だそうで、実際の就職したい企業ランキングでは、１位は電器の海爾（ハイアール）、２位、３位はいずれも外資でＩＢＭ、Ｐ＆Ｇである。初任給希望額は約2400元で企業の許容限度をかなり上回り、高望みする学生と安く抑えたい企業とのミスマッチが年々拡大している。また、安定度が魅力で教員志望が増えているが、公務員がランク外というのが日本と大きく違うところだ。勤務地では北京や上海などの大都市が根強い人気を誇っている。以前の中国は社会生活のマナーが無いに等しかったが、最近はビジネスマナーを重視する国外の慣習が定着してきた。大学生もこの辺りには敏感で、上海など大都市では、就活中の学生の間で、面接対策の日本式マナー研修が人気を博し、就職試験で好印象を与えようと、ドアの開け方、挨拶、着席、服装、髪型、表情の作り方などの習得にいそしんでいるようだ。

大学の門戸が毎年数十万人単位で広がり、学士や修士が巷にあふれ、折角の卒業証書（学位）も価値下落が深刻である。入口が広がったぶん出口での競争が激しくなり、「大学は出たものの」期待したほどの価値は無く、４年生や新卒生は厳しい就職活動に東奔西走する。授業中も携帯電話をオンにして会社からの連絡を待ち、電話の内容に一喜一憂するという。教師はいくら授業中の着信音に悩まされても、学生の苦労をみると、仕方ないと思うほかないそうだ。しかし、博士は別格で学位を高値で売り込めるので、ひとりっ子に対する親の期待に、学生自身の高学歴志向が加わって、大学院の進学熱が高まり、現在ではかなり狭き門になっている。

日本に比べれば、まだまだ中国の大学の門戸は狭いが、学生数が急激に増えて、もはや特別なエリート的存在というほどでもなくなってきた。今後は、日本人の観点から見ても、「普通の」大学生がますます増えていくだろう。

中国の大学生については、手軽にインターネット、中国語の『百度』、日本語の『人民網日文版』等の検索サイトで、「中国、大学生、生活」などキーワードを入力してみると、思いのほか沢山の情報が手に入る。皆さん自身のセンスで情報の質をチェックしながら「中国の大学生事情」を調べてみてはどうだろうか。

当世ロシア学生事情

経済学部
清　水　伸　子

≪学生結婚が減ったのは・・・≫

むかし、ロシア人はとにかく結婚するのが早かったし、離婚率も高かった。30代前半で3度目の再婚ということもさほど珍しくはなかったそうである。昔といっても今から10年ほど前までの話だ。ここまで読んだら、「10年前って、小学生の頃の話だから、うん、昔の話だね！」と思う人と、「えっ！10年と言えば、ついこの間までの話じゃないか」と思う人の2通りに分かれると思うのだが、これが悲しいかな、大学の授業でよく生じている学生と教員とのすれ違いの原因である。

のっけから話がずれてしまったので、話を元に戻そう。1991年にソ連邦が崩壊するまで、ロシア人の初婚の結婚年齢は大変若かった。当時女の子なら18～19で結婚するのは当たり前、男の子なら20～23といったところであった。私立大学のなかったソ連邦時代は現在より大学の数が少なく、学生人口も少なかったのだが、この傾向は大学に進学したかどうかには関係なかったので、したがって年齢を見ても分かるように、当時の学生は学生結婚をするのが大変多かったのである。この傾向はソ連邦が崩壊しても4～5年は続いたので、だから『10年ほど前までは』という話になる。私の知り合いのロシア人女性は、10年前に25歳で結婚したのだが、私が結婚祝のプレゼントを渡したときに彼女が「私、恋人も婚約者もいなくて結婚できないまま大学を卒業しちゃったから一生独身だわ、て、もう21歳ぐらいの時には覚悟してたの～！」というのを聞いて、私はあまりの驚きに口があんぐり開いたままになってしまってあごが外れそうになったぐらいである。

現在では平均結婚年齢は上がり、学生結婚をする人はほとんどいなくなっているのだが、これにはやはり社会主義体制の崩壊が大きく絡んでいる。ソ連邦時代には全ての大学が学費無料の国立大学であり、また大学生には奨学金が支給されるため親に経済的に依存しなくてもまあまあやっていけるという状況であった。また、私有財産の所有が基本的に認められなかった社会主義時代は住居も国から支給されたわけだから、結婚すると親と別世帯として独立の住居を支給されるといったことも利点として働いたようだ。ロシアには、基本的に今も昔も個室仕様になっている寮を持っている大学はほとんどない。シャワー・トイレ付きの2人部屋なんていうのは良いほうで、３～４人部屋でシャワー・トイレ・キッチンは各階に一つずつなんていう寮が現在でも一般的である。だから、日本と違って男女がホテルに宿泊するときにはパスポートと結婚証明書の提示が必要だったソ連邦時代に恋愛で燃え上がった若い二人は、親元で暮らしていても、また寮に住んでいたらなおのこと、「さっさと結婚して住居をもらい二人きりで長く過ごそうよ」という勢いになったのである。

現在はというと、社会主義体制が崩壊したため住居の支給という制度はもちろんなくなり、国内の大学は国立大学であっても授業料が有料、物価上昇のために奨学金支給額は実質減少と、学生にとっては結婚をしたくてもできない状況が揃ってしまった。もちろん現在の若者の結婚観・人生観の変化もあるだろうが、この学生を取り巻く経済状況の変化が大きな原因であったことは間違いない。一説によると、現在の初婚の結婚年齢は女性が23～26、男性が24～28ぐらいに上がっているらしい。

かくして、現在の学生は、学生結婚をする人こそ減ったが、社会主義体制が崩壊し資本主義とともにロシアに入ってきたありとあらゆるモノに物欲を刺激され、携帯電話や流行のファッションのために必死で昼夜を問わずカフェのバイトにいそしんでいる。『昔と比べて今の学生は本当に勉強しなくなった』という先生達の愚痴も学生結婚が減少したのも同じ社会の体制変化が原因なのだ。ただしこの体制変化は離婚率の高さにだけは影響しなかったらしい。ロシアの離婚率は相変わらず高いままである。

≪大学に入学するには・・・・≫

現在ロシアでは、ソ連社会主義が崩壊した後に私立大学が雨後のたけのこのようにでき大学の学生定員数が増えたが、それでも大学進学は狭き門である。

これには理由が２つある。１つは、社会体制の大きな方向転換を経験し未だ混乱が残るロシア社会において少しでも快適に生き抜いていくためには、新しい知識やITなどの技術あるいは特殊な専門性を身に付けておいたほうが良いと考える若者が多いためである。このため、パソコンやIT関係の学部、医学部、法学部、経営学部といった学部が現在ロシアで人気のある学部なのである。そしてもう一つの理由は、これは男の子にしか当てはまらないが、兵役を逃れるためである。ロシアでは18歳以上の成年男子は兵役の義務があるが、大学に進学するとそれが猶予される。免除されるわけではないのだが（28歳以上は兵役がない）『とりあえず今は行きたくない』式に大学進学を目指すのである。

では大学に入学するにはどうしなければならないのか？日本の推薦入試に当たるような制度もあるが、推薦入試に応募できるのは学校の成績がオール５の生徒だけである（オール５をとった生徒は学校から『金メダル』を授与されて表彰される。その数は各校でほんの数名しか出ない）。進学を希望するほとんどの生徒は入試を受けて合格しなければならない。しかし、この入学試験のメニューが日本とはちょっと異なる。ロシアの大学入試はペーパー試験と小論文と面接で決まる。小論文はかなり専門的なテーマが課され長さも要求されるし、面接は口頭試問を含んでいる。

では、試験に合格するとこれでめでたしめでたしかというとそうではない。実は、学費が支払えるかどうかという経済的な問題が残る。

国立大学に通う学生に学費はいくらとたずねると、『うーん、人によって違うから・・・』という答えが返ってくる。どうも入試の成績によって学費が違い結構高い授業料を払っている学生も少なくないらしい。私立大学はもちろん国立よりも高い。現在のロシア人の平均的な月収はおそらく300ドルから450ドル程度だと思うが、5年程前に知り合いの娘が年額3000ドルの学費がかかる私立大学の経営学部に入学したと聞いてその学費の高さに驚いていると、この金額は国立大学と比べれば多少高いがそれでも大学の学費としては高い方ではないというのを聞いてさらにのけぞったことがある。これは5年前の話だから今はもっと高くなっているはずである。月収



モスクワ大学

300～450ドルでは、今のロシアの物価水準を考えると、家族がいる世帯はほとんど貯金ができない状態である。したがって、平均月収の半年から1年数ヶ月分に相当する額が1年の学費というのはなかなかシビアな問題なのだ。

≪試験はテストじゃない≫

『試験はテストじゃない！えっ、じゃあ、どうするの？ひょっとして、試験なし！？』と思った人、世の中はそんなに甘く無い。試験はペーパー試験（＝テスト）ではないということ。ロシアの大学では、学期中に課されるレポート（20枚程度）２～４本と学期の最後に行われる口述試験で成績評価が決まる。ロシア語では口述試験や小論文はイグザーミェンと呼ばれる。

このイグザーミェンの形式は、大体はある特定の1日に先生が広い教室にずっと詰めていて学生は自分の都合のいい時間にその教室に試験を受けに行いくという形である。教室に入ると予め異なる問題が入った封筒が数枚用意されており、その中から一つを引かされて2～3分まとめる時間をもらった後自分が引いたテーマに関して説明し始めなければならないというもの。出題テーマは通常予告しない先生がほとんどだが、たまに50ぐらいのテーマリストを渡してくれる親切な(？)先生もいるらしい。もちろん持ち込みは不可。答えられなかったり言葉につまって黙ってしまうと、『はい、後がつかえてるからもう帰って』と非情な声がかかる。ただし、現在ロシアでは日本のセンター試験のような統一試験の導入が教育省で計画されている。段々とロシアの大学の試験も変わってくるかもしれない。

フランスの学校生活

文 学 部
高 橋 秀 雄

「世界の大学生事情」というテーマから少しずれるかもしれないが、私は今日の教育の状況と問題を考える一つの手立てとして、27,8年前に体験したフランス留学生活を思い返してみたい。

愛知大学に赴任して４年目の1978年７月、大学の許可を得て、私は１年間のフランス留学に出発した。これは私にとって２度目の、この回は妻と、５歳の長男、10ヶ月の長女をつれての渡仏であった。

私はこの留学に２つの目標を立てた。一つは、当時私は文学部の科目「フランス語史」と「フランス語学概論」をそれぞれ隔年に担当しており、こうした科目がフランスではどのように行われているのかを是非知りたいと思っていたので、１年間フランスの学生たちと机を並べて、直接フランス語学の授業を受講することであった。もう一つは、フランス人とはどういう人たちかを知るために、フランス人の社会にできるだけ深く入り込んで、家族としての生活を体験することであった。

まず、生活の基盤を固める必要があった。住居は、すでにパリでの留学生活に入っていた経営学部の藤本光夫氏がお世話してくださって、郊外のルヴァロワ・ペレ市の閑静な地区の、炊事などができる月ぎめのホテルに入ることができた。しかし、この住居は子どもづれの私たちには少し閑静に過ぎた。妻はフランス語がまったくできないが、それをものともせず、すぐに主婦の日常の生活を始めてしまった。というより、幼い子ども２人の世話をするのに、一刻の猶予もなかったのだ。当然、宿の女主人とぶつかることになる。中庭から見えるところに洗濯物を干してはいけない、とマダムが言えば、子どもがいるのだから洗濯物を干さないわけにはいかない、と妻が反撃する。日本語とフランス語で言い合う場面が続いた。私はこのマダムは悪い人ではないと思っていたが、妻はあの人は意地悪だ、きらいだ、と言い出した。せっかく藤本さんが骨折ってくれたのだが、ここに至って、子どもづれの家族にいっそうふさわしい所を急遽探さなければならない、と悟った。子どもが遊べるくらいのある程度のスペースがあって、家賃月10万円以下のところはないか。朝起きるとすぐフィガロ紙を買い、ただちに三行広告を検討して、公衆電話から電話をかける、ときには不動産屋さんに車で物件に案内してもらう、など必死に探して、１週間後、同じルヴァロワ市内に現代建築の７階、50平米の家具つきのアパルトマンに入る契約をすることができた。家主はイギリス人の女性であったが、それから１年間、ボージョレー出身のご主人ともども、店子に対する大家の立場に立って、私たちにいろいろ世話をしてくれた。

子どもは、下の娘が日本を発つ前は下痢がなかなか治らず、医者通いが続いて心配したが、フランスに来た途端、気候が合ったのかすっかり元気になり、また鼻がぺちゃんこなのがおもしろいのか、どこに行っても人気者になった。

５歳の息子は、早く友だちをつくって遊びたくてしかたがないという様子だった。８月中に市役所でエコール・マテルネル（保育学校）への入学手続きを済ませた。

フランスの初等教育は６歳からだが、その前に、日本の幼稚園に相当するエコール・マテルネルがあり、３歳児から５歳児までを受け入れる。これは義務教育ではないが、無償であり、フランスではほとんどの子どもが入学する。

９月１日に新学期が始まった。といっても、大学はまだだ。子どもを学校へつれて行くと、学校の入り口のドアの前で先生が子どもたちを一人ひとり迎え入れる。昼食の時間にはドアがあいて、保護者は教室まで行って子どもを受け取る。送り迎えは１日３回あり、昼食後また子どもを送って行き、放課後また迎えに行く。最近、日本では下校中に子どもが誘拐されるなどの事件が相次いでいるが、フランスではずいぶん前から子どもの保護に注意が向けられてきたようだ。公園なども、子ども専用のスペースのあるところがあり、管理人が入り口の前に立っていて、大人は保護者しかそこには入れない。

息子は最初外国人用のクラスに入れられたが、すぐにフランス語に慣れ、１ヶ月後にはフランス人のクラスに替わった。母親といっしょに買い物に行くときには、「通訳」を務めるようにもなった。学校では、歌を歌ったり、絵を描いたり、物の名前を発音したり、ただただ楽しいらしく、目を輝かせて帰ってくる。私も先生と知り合いになって、子ども用の絵本辞書や物語絵本をいただいたり、良い本を教えていただいたりした。学校は無償と言ったが、それは文字通りの無償で、鉛筆、絵の具、画用紙にいたるまで、何でも無料でふんだんに配ってくれる。

エコール・マテルネルと小学校の前半３年間は、水曜日は学校がない。月火の２日行って１日休み、木金の２日行って土日の２日休むという具合で、幼い子どもには生活のアクセントがついてよい。休暇といえば、夏休み以外に、クリスマス休暇とか復活祭の休暇など、１週間、あるいは２週間続けて休む期間が１年のうちいくつかある。そのうちのどれかに、エコール・マテルネルの生徒をブルターニュに２週間つれて行く、市が主宰するお泊り保育（コロニー）があり、これに息子を参加させた。費用は無料であったか、あるいは驚くほど低廉であった。夜遅く、市役所前の広場を出発するのだが、小さな子がはじめて親元を２週間も離れるということで、どこの家も、おじいちゃん、おばあちゃんに至るまで、家族全員が見送りにきていて、たいへんな賑わいである。バスの窓に向かって、「ぼうや、こっち向いて」などと叫んでいる。子どもたちと同じくらいの数の若者たちがボランティアで参加しており、面倒をみてくれる。家の方へは毎日手紙が送られてくる。わが息子はひらがなで文を書けるので、日本人は５歳で手紙が書けるのかと、驚かれた。

義務教育ではないエコール・マテルネルに、国は子どもたちが全員入るようにと積極的に勧めている。また、コロニーの計画を市町村が積極的に行う。こうしたところにも、子どもたちを学校教育に慣れさせることへの、そして知識を身につけさせるだけでなく、子どもに社会性を身につけさせることへの、フランス人の並々ならぬ意欲が感じられる。

フランス語教育にはとくに力が入れられている。最初はゆっくり進められるが、進度は徐々に加速して、小学校高学年になると、生徒は驚くほどたくさんの本を読み、これを分析し、口頭および文書で意見を発表するところまで進められる。到達目標が高く、落第する生徒もあるようだが、落第生の面倒も最後まで見る仕組みになっている。

私自身は、フランスの一般的な市民と同じペースで生活してみようとした。朝は７時にパン屋さんにパンを買いに行く。通勤者向けのラジオを聴きながら朝食をとる。地下鉄に乗って、パリ大学のソルボンヌ、ジュッシューの校舎で行われる、学部、大学院のフランス語学、言語学の授業に参加する。また、人に勧められて、週に１回は東洋語学校（ラングゾー）に出かけ、オリガス先生の福沢諭吉の講読演習、藤森文吉先生の日本語＝フランス語、フランス語＝日本語の同時通訳の大学院の演習にも参加した。また毎日モンド紙を買い、１時間以上克明に読む。夕食後は、ときおり、芝居、音楽会にもでかけた。

ソルボンヌで行われた学部の授業について少しふれる。フランス語史、方言学の大家であるショーラン先生の授業は８時に始まる。外はまだ真っ暗である。200名以上入れる階段教室で行われるのだが、第１回目は満員だったのに、内容がむずかしいのか、その後出席者は急減した。それでも、先生の講義の姿勢は変わらない。最終回は５,６名の出席者の一人ひとりに先生は親しく話しかけてくれた。

語彙研究で著名なアルヴェイエ先生の授業は中教室で行われたが、こちらは終始満員の盛況であった。どこでもそうだが、授業の出席を取ることはない。受講者の年齢層はさまざまで、年輩の聴講者もかなりある。私の場合は、８月にスペインで１週間以上にわたって開催された国際中世叙事詩学会に参加した折、夕食会の席上で先生に紹介され、授業に出る許可をいただいた。50分授業だが、先生は教室内にかかっている大きな時計を見ながら、時刻どおりにはじめ、ぴったり終わる。毎回５分間ほど、新聞や論文で読んだ話題についてコメントし、それから本論となるが、前回の続きをいきなり話し出す。学生たちも、５分間の話には耳を傾けるだけで、本論だけを丁寧にノートしているようだ。古フランス語のテクストのプリントを配布したことがあった。そのとき、先生は講壇近くの学生をいきなり指名し、現代フランス語に訳すようにと言われた。すると、その学生は、何のこともなく、ゆっくりと端正なフランス語を紡いで行ったのだ。フランスにおける言語教育の底力を感じさせられた。

ドイツの大学

文 学 部
河 合 まゆみ

ドイツの大学の歴史は古く、1386年のハイデルベルク大学創設までさかのぼる。もともと大学（ドイツ語ではUniversität）は、中世ヨーロッパにおいて教師と学生が団結して研究と学問の自由を守ろうとしたのが始まりである。広くドイツ語圏（ドイツ語が母語として使われている地域）を見れば、すでに1348年プラハ、1365年ウィーンにそれぞれ大学が創設されており、ゆうに600年以上の歴史を刻んでいることになる。ドイツの大学について語ろうとするなら、忘れてならないのが、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767～1835）の業績である。学者であると同時に政治家でもあったフンボルトは、新人文主義を標榜し、研究と教育の自由、幅広い教養の獲得を目指した。1810年に彼が創設したベルリン大学（現在のフンボルト大学）は、長く近代大学の模範と見なされてきた。しかし第二次世界大戦後は教育の機会均等が謳われ、大学の大衆化がすすみ、ドイツの大学はもはや少数のエリート養成の場ではなくなった。従来の伝統的な総合大学に加え、神学大学、芸術大学、教育大学、さらには専門大学といった新しいタイプの大学も増えた。進学率が飛躍的にのびた現在では三人に一人が大学で学んでいる。



小難しい話はこれくらいにしておいて、次に学生の視点から日本の大学とドイツの大学の目立つ違いをいくつかあげてみよう。

■入学試験がない

ドイツの大学には入学試験がない。こう言うと日本の受験生たちの「なんてうらやましい！」という声が聞こえてきそうだが、当然のことながら試験が全くないわけではない。ギムナジウム（日本の普通科高校にあたる）の卒業試験アビトゥーアに合格すれば、同時に大学入学資格も得られ、基本的にはどの大学のどの学部にも入学できる（とはいっても、医学部や歯学部などは人気が高いため入学制限をもうけている。世の中そうそうあまくはないのである）。「大学の偏差値ってないの？！」という声があがりそうだが、そのとおり、ドイツには大学間の格差など存在しない。どの大学で学ぶか、は問題にならず、むしろどの教授のもとで学ぶかが重要になってくる。したがって、よい教授をもとめて途中で大学を移ることも珍しくはない。このあたり、政治、経済、文化、そして大学まで、すべてが首都東京に一極集中している日本と、歴史的に長らく領邦国家であったがゆえに地方分権が根づき、それぞれの地方が（その地の大学もふくめて）独自の歴史、文化を誇りにし大切にしているドイツとの違いがはっきり表れている。

さて日本では、4月、桜の舞い散るもとでの入学式という風景がおなじみだが、完全セメスター制をとっているドイツの大学では、4月でも9月でも、どちらでも入学できる。そもそも、いつ大学での勉学をスタートするかは個人によってまちまちで、日本のような入学式は（ちなみに卒業式も）ない。たとえば男子学生なら、大学入学前に兵役義務か代替役務（良心上の理由から兵役を拒否する場合につく社会奉仕活動）が課せられている。あるいは職業訓練や研修を受けてからというのもよくあるケースである。前述の大学入学資格は一度取得すれば生涯有効なので、この点、ドイツの大学は、日本の大学よりはるかに広い年齢層の様々な境遇の人たちに開かれた場所といえよう。

■授業料がいらない

日本では子供を大学にやると（とくに私立大学で、東京に下宿などされると）、親の経済的負担が並大抵ではないが、ドイツの大学はほとんどが国立（実際は州立）で学費は無料である。ここでも、「えーほんとう！？」という驚きの声が聞こえてきそうだが、だからといって、ドイツ人学生がその分優雅なキャンパスライフを送っていると勘違いされては困る。ドイツ人は日本人よりはるかにつつましやかな学生生活を過ごしている。服装もいたって地味というか、気をつかわないし、食事も学生食堂のメンザで安く済ませる。ドイツでは、大学生が非常に安く生活できるよう様々な便宜がはかられているし、学生寮に住むか、あるいはWG(Wohngemeinschaft)とよばれる方式で部屋をシェアして借りれば住居費もそうかからない。学生は、奨学金をもらうか、学業が許す範囲で（たとえば夏休みとかに）バイトして本代や生活費を稼ぐので、親は必要最低限の仕送りしかしないのが普通である。自分が遊ぶためにバイトするなんてことは、ドイツでは考えられない（このあたり声を大にして言いたい！）。というか、勉強が大変で、遊ぶ暇もバイトする暇もないのが実状である。大して怠けなければ自動的に卒業できる日本の大学と違って、ドイツの大学は卒業するのが難しい。卒業に必要な単位はドイツの大学のほうが断然少ないのだが、この必須単位を取るのが生易しいことではない。ただ出席さえしていれば寝ていても単位が天から降ってくるどこかの大学とは大違いである（？）。どのゼミに出席するかは学生が自分で決めるのだが、前もって担当の教授の面会時間に訪ね、話し合って関心のある発表テーマをもらう。もちろんゼミ発表の数週間前から図書館にこもって、多くの文献と格闘することになる。また授業では、つねに積極的に議論に参加する。ドイツでは黙っていてはバカと思われるので、とにかく自分の意見を（正しいかどうかはそっちのけで？）主張しまくる必要がある。こうして学期の最期にレポートを提出して、やっと単位がもらえる次第である。

■何年いてもよい

日本では、大学は4年間で卒業するのが普通であるが、ドイツでは、最短在学期間が8学期（4年間）と定められているだけで、何年大学にいてもよい。ドイツの平均在学期間は7年で、日本よりはるかに長い。これにはいろいろな理由が考えられるが、まず授業料がいらず、大学生でいると安く暮らせるというのが第一の理由であろう。今のご時世、ドイツでも大学卒業後の就職はかなり難しく、それならあわてて卒業するより学生でいたほうがお得というわけである。他方、卒業が難しいというのも一因になっている。ドイツでは、卒業試験にしろ国家試験しろ、受験できるのは2回までと決まっている。つまり失敗は一度しか許されないという厳しい世界なのである（その点、日本では何年でも浪人できるけれど…）。卒業試験に2回落ちれば、適性なしと見なされ放校の憂き目に遭う。したがってドイツ人学生は十分に準備し、合格の自信が持てるまで試験を受けようとはしない。こうして在学期間は延びる一方、その結果、国家財政の負担はますます増えることになる。最近は政府の財政危機から大学の授業料の導入や在学期間の制限も議論されているので、近い将来は、大学も有料になる可能性が高い。

最後に小さな相違点を付け加えるなら、ドイツの大学は朝が早い。これは大学に限らず、すべての学校、会社もそうなのだが、遅くとも8時には始まる。ちなみに筆者は朝型人間のため、留学中も困ることはなかったが、ただ冬など朝の8時はまだ真っ暗、気温も氷点下であるため、さすがに布団から出るのがつらかった記憶がある。この点、某大学では一時限目が9時過ぎからであるにもかかわらず､遅刻者が絶えないのはいかがなものかと首をかしげたくなる。

日本とドイツとの大学の違いを思いつくままあげてみたが、念のため言っておくと、これはどちらがいいとか、悪いとかの話ではない。実際に両方の大学で学んでみると、どちらも一長一短であることがわかる。これから皆さんは、ドイツに限らず海外の大学で学ぶチャンスが必ずあると思う。そのチャンスを生かし、勉学だけでなく多くのものを吸収してくれることを期待して、この原稿を終えたいと思う。

私の日本語修業時代

国際コミュニケーション学部　トーマス　グロース

普通にここにあるコラムの見出しには「私の外国語修業時代」というタイトルがある。しかし、日本人が母語として話している日本語は私にとって外国語なのである。日本語は、私にとって第一外国語ではなく、5歳のときに親と一緒にベルギーに引っ越したので、初めての外国語はフランス語であった。フランス語は、私はとくに習ったわけではなく、自然に身についていた。言語心理学者が「臨時期間」とよぶ時期に、私はフランス語を身につけたのである。だから今でも、フランス語が聞こえると、ほかの外国語とかなり違って親しい気持ちがする。10歳のときには、学校で英語を習い始めた。父親の友達や同僚のなかにはアメリカ人が多かったので、早い段階で、アメリカ人の友達ができ、英語の上達はとてもはやかった。英語に接したのも「後期臨時期間」だったので、英語を話したり聞いたりするのも、母語を話したり聞いたりするのとほぼ同じである。フランス語や英語と違って、日本語は相当遅い段階から習いはじめた。

ただ、「修業時代」と言ったら過去の話になりそうだが、日本語を勉強し始めて２０年間が経った今も、未だ修業が終わっていないという感じである。今は、毎日一生懸命という訳ではないが、毎日、私生活でも職場でも日本語に触れているので、毎日少しでも上達できるような気持ちはある。20年前、偶然、日本語と初めて出会った。当時、大学で哲学を専攻していた私は、副専攻科目がひとつ足りなかった。色々試してみたが、気に入った科目はなかなか見つからなかった。友達が日本語にしたのがきっかけで、日本語の教科書が手に入った。漢字の形、そしてその美しさに感動し、どうやって学ぶのだろうか、と思って、日本語を習ってみることにした。漢字は私の日本語への興味の原点ではあったが、日本語が漢字だけでないことがすぐに分かった。漢字は美しくてもただの文字で、言語と厳密的な関係はない。もし書こうと思えば、ドイツ語でさえ漢字で書けるのである。

幸運なことに、大学時代の日本語の先生は、特に日本語の形態論を専攻している立派な言語学者であった。そこで初めて分かったのは、日本語の美しさである。私は、「美しさ」ということばで想像しているのは、日本人と違っている概念であり、日本語の形態論体系なのである。日本語の形態論体系は非常にきれいに整理されている。私の大好きな日本語の表現「やめさせられないのでしょうか」を例に説明してみよう。信じがたいが、この表現は確かに一つのことばである。言語学者が「自立できる」と考える部分は「やめ」だけであり、残りの部分は自立できないものである。「やめ」は動詞で、接尾辞「させ」と「られ」も動詞である。「させ」を「やめ」につけても「やめ」の品詞性は変わらないが、「やめ」に接尾辞「な（い）」をつければ、品詞性が変わり、「やめない」というのは派生形容詞となる。だから、「やめさせられない」も、一つの形容詞である。こういうことを私は魅力的に思っている。自分の母語のドイツ語では、一つのことばにならないどころか、動詞に否定形はなく、副詞「nicht」を使わなければならない。日本語の「やめさせられない」に、さらに助詞「の」をつけると、派生名詞となり、「やめさせられないの」に助詞「でしょう」をつけると、品詞性は動詞に戻ってしまう。一つのことばに、様々な文法項目をまとめることができるのは、私の立場からみれば、日本語に「さすが」と言いたいところなのである。

私の母語であるドイツ語と類型的にこんなに異なっている言語を身につけるにはかなり時間がかかったが、読書することより、実際の会話をしてきたのが役に立ったと思っている。日本語を話すのは、初心者にとって決して簡単なことではないが、十分な時間が経てば、いつかひらめくように話せる日がくると思っている。

●塩山正純先生には全文に目を通していただき、日本語の表現を中心に適切なコメントをいただいた。ここに記して感謝にかえたい。

LL Tea Time

春休み・卒業旅行に ラオス旅行はいかが？

国際コミュニュケーション学部４年
谷　中　珠　里

「一番好きな国はどこ？」と聞かれたら、私は“ラオス！”と即答する。さて、ラオスと聞いて、何を想像する？かつてフランスの植民地だった国、発展途上国、小泉総理が初めてのアセアン＋3首脳会談で訪れた国（中継の時、小泉総理の顔に何度かハエが止まっていた！）、うーん、ラオスって・・・？と以外に頭に浮かんでこない国ではないだろうか？実は、この謎に包まれた国ラオスはたくさんの魅力を持っている。まず、何と言っても、ラオス人！この魅力はラオスに行って自分で感じとってもらいたい。言葉にすると、ラオス人は○○と先入観を持ってしまうし、ラオスは地方地方でいろんな顔を持っているから○○な人とは簡単に言えない。だから、ラオスに行って確かめてみるべし！他にも、たくさんあるラオスの魅力を全て紹介したいが、ここでは、敢えて一つだけの紹介に留めておく。それは、ラオスの壮大な自然。下記の私の体験記からラオスの自然を少しでも感じていただけたら、うれしく思う。

私がこれまでの人生の中で本当に深い「喜び」を感じたのは、ラオスのバンビエンという田舎町を訪れたときのことである。バンビエンは、周りを山と川に囲まれた自然豊かなところで、その自然は生半可なものではない。人工の手が一切加わっていない、まさに自然度１００％の壮大なものなのだ。私は、ここバンビエンで、タイヤチューブに乗って川下りをするという、何ともラオスらしい素朴な遊びに挑戦した。まずは川の上流地点へトラックで連れて行ってもらい、そこから川にタイヤを浮かせてスタート。ゴール地点は、バンビエン。あとはタイヤの中心に座り、透き通るほどきれいな川の流れに沿ってただ流されるがまま。川の両脇にはどこまでも山々がそびえ、大自然のリラクゼーションを肌で感じる。いつしか、幼少の頃のワクワクする冒険心が体中に蘇ってきた。この川下りというものは、たいてい日が高くて気温も高いうちにスタートするのだが、私と友人は日が傾き始めた４時頃から試みた。日が暮れる前には十分着けると甘くみていたからだ。視界が悪くならないか、川が冷たくならないか心配し始めたのは、下りだして少したってからのことだった。日が暮れ始める頃、川の流れが弱まり、川の脇では住民たちが水浴びを始めた。そして完全に日が落ちると、水温が一気に低下し、緑の美しい山々も黒く



カメラにびっくり！シン（ラオスのまきスカート）をはいた学校帰りの子供たち

不気味な姿に変貌していった。どこかに水牛がいるのではないかと注意深く周りを見回していた。民家も人影も消え、川の幅はどんどん広くなり、恐怖と不安でいっぱいになった。そんな中、ふと空を見上げると、こぼれ落ちそうな満天の星空があった。オリオン座の中にいくつもの小さな星が見える。星がきらきら光るという言葉の通り、空一面にきらきらという響きが無限に広がり、私は心の底から感動した。長いこと、川の流れに身をゆだね、私の体は自然の一部と化していた。バンビエンに着いたのは、夜の８時。４時間の川下りから、私は自然の生命力の強さ、すばらしさを改めて体感した。最も強く喜びを感じたとき…　それは、ラオスのバンビエンで川下りをし、自然のすばらしさに心打たれた真夏の夜のことである。



バンビエンの穏やかな街並み

【ラオス・トラベル・メモ】

現在ラオスは自由に旅行できるが、交通事情はまだ悪い。なるべく、新しい情報を集め、充分に気をつけて旅をしよう。ラオスの通貨はキープ（KIP）。両替はＵＳ＄かタイバーツの現金ならまず安心。Ｔ/Ｃや日本円の現金も、ヴィエンチャン市内の銀行で両替できる（キープをタイ国内でバーツに再両替することはできない）。

また、ヴィエンチャン市内ならタイバーツがそのまま使える。ガイドブックは、地球の歩き方ラオス1冊あれば、旅をかなり満喫できると思う。ラオスに行く前に、必ず外務省の安全情報を確認しておこう！！！

2006年 FIFAワールドカップ ドイツ大会

文学部３年
森　　隆　裕

日本全土がサッカーに熱狂した2002年FIFAワールドカップ。あれから早４年が経とうとし、2006年FIFAワールドカップドイツ大会の開幕が刻一刻と近づいてきている。ここでは今一度FIFAワールドカップドイツ大会について述べていこうと思う。

そもそもなぜドイツでワールドカップが行われることになったのだろうか？FIFA会長ジョセフ・ブラッターはワールドカップ大陸巡回方式を提案しており、2006年はまだ一度も開催されていないアフリカの地でワールドカップを開催することを望んでいた。実際、前評判は2010年のワールドカップ開催地となった南アフリカが高かった。しかしドイツと南アフリカの決選投票の結果、12対11、棄権１でドイツでの開催が決まった。要因は治安、インフラの整備、スタジアムの規模などが挙げられるだろうが、個人的に最も大きかった要因と思われるのは2006年ドイツワールドカップ組織委員長、フランツ・ベッケンバウアーの精力的な招致活動だろう。ドイツのサッカークラブ、バイエルン・ミュンヘンの会長でもあった彼だが、愛するクラブが優勝したとき、彼は歓喜の輪から遠く離れたニュージーランドで招致活動をしていたほどだ。彼は計３回、ドイツへワールドカップを持ってきたことになる。１回目は1974年西ドイツ大会に選手として、２回目は1990年イタリア大会に監督として、そして３回目となる今回。彼の功績は称えて然るべきだ。

さて、みなさんは４年前を覚えているだろうか？日本の決勝トーナメント進出、そして隣国韓国の快進撃などに代表されるように新興勢力の台頭が目立った大会だったと言えよう。しかし裏を返してみれば、サッカー強豪国と言われていた国の不甲斐無さが顕著だったとも言える。その理由として、過密な日程のリーグ戦で蓄積された疲労を十分に癒す時間

がなかったことが挙げられる。そのためコンディションが悪く、低調なパフォーマンスしかできなかった。それを改善すべく、2002年ワールドカップ以後、各国スタープレイヤーが集結するヨーロッパで幾つかレギュレーションが変更された。例えばヨーロッパNo.1クラブチームを決めるUEFAチャンピオンズリーグでは、以前の大会日程は１次グループリーグ、２次グループリーグ、準々決勝、準決勝、決勝だったものがグループリーグ、ベスト16、準々決勝、…へと変更された。これによりミッドウィークに毎週行われていた試合が隔週になることで試合数は減り、選手の負担も減ると考えられている。次に前回ワールドカップの準備期間が欧州の各リーグ終了後２週間しかなかったが、今回は１ヶ月与えられるように日程が変更され、コンディションの回復に多くの時間を費やせるようになった。ここまでくれば早期敗退という結果になっても言い訳はできない。純粋に国と国との試合も面白いが、強豪国と呼ばれる国とそうでない国の全体的な成績を比較してみても面白いと思う。強豪国にとって今回の大会はいわば威厳を取り戻すための戦いになるだろう。

４年前、決勝の地横浜でドイツを破りブラジルが５度目の優勝をなしえたわけだが、今回もブラジルが優勝する確率は他の国々よりも高い。2005年に開催されたプレワールドカップ、コンフェデレーションズカップを見ても分かるように、圧倒的な質と量を誇る中盤、フォワードは他の国の追随を許さない。特にロナウジーニョは2005年欧州最優秀選手に選ばれ、日本のマスコミがよく使う言葉を用いれば、世界最高のファンタジスタと言える。次に続くのはアルゼンチン、イタリア、オランダ辺りだろうか。開催国ドイツは、前回、オリヴァー・カーンの神懸り的な活躍があり下馬評を覆して決勝まで進出した。元名FWであったユルゲン・クリンスマンが２年前からドイツ代表の指揮を執り始め若手選手を積極的に起用、平均年齢の高さが問題となっていた数年前と比べてはその心配も消えた。しかし逆に平均年齢が低くなりすぎてしまった。ドイツ代表のスタメンには私達学生と同じ世代の選手が４人もいる。そこを考慮すると現在の若手選手が成熟してくる2010年により期待が持てるであろう。ただし今回はなんといってもホームアドヴァンテージという大きなメリットがある。ドイツ国民の大歓声を背にして今回は優勝を狙う。そのキープレイヤーとなるのがミヒャエル・バラックだ。前回大会の決勝戦では累積警告で出場できず、涙を呑んだ彼だが、あれから大きく成長し、今まさにキャリアのピークを迎えている。クリンスマンのドイツ代表監督就任に伴い、ゲームキャプテンもカーンからバラックへと代わり、統率力も備わってきた。彼には注目してもらいたい。もう１人、注目してもらいたい選手がいる。それはフランス代表のジダンである。彼は2007年まで所属するレアル・マドリーと契約を残しているのにも関わらず、2006年ワールドカップ終了後、代表チームだけでなくクラブも、つまり現役を引退する意志を固めている。ラストダンスとなる今回、目に焼き付けておきたいところだ。そして日本だが、軸となるFWを作ることが目標のベスト８進出の大前提だ。怪我が間に合えば、と仮定がつくが、東欧遠征で活躍した久保に期待がかかる。他にも初出場とはいえウクライナやコートジヴォワールなど好チームもまだまだある。どんな番狂わせが起きるのか、どんなプレイヤーが活躍するのか、そしてどこが優勝するのか。ワールドカップ開幕を楽しみに待っている。



2005年７月ドイツチーム「バイエルン」来日時、ドイツリーグ戦優勝チームに授与されるマイスターシャーレを持つ筆者。(現地の雑誌『Super　Bayern』(2005.10)に掲載)

愛知大学言語学談話会　―第31回―

公開講座「言語」2006 プログラム

〈前期〉愛知大学豊橋校舎研究館1階会議室
　　または5号館教室・会議室
〈時間〉14:30～16:30

2006年
①４月１５日（土）
「19世紀フランス高級娼婦列伝Ⅱ」
　　加籐俊夫（愛知大学名誉教授）
②５月６日㈯　於　５号館２階524教室
「ことばと文化―アジアと中欧―」
　　田本健一
　　（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）
③６月３日㈯　２講義開催
「社会状況と言語」
　―フランス語を学び教えて―
　　高橋秀雄（愛知大学文学部教授）
　―ドイツ語を学び教えて―
　　鈴木康志（愛知大学文学部教授）
④ ６月17日㈯
「ナルニア国物語とアイルランド」
　　安藤　聡（愛知大学経営学部助教授）
⑤７月８日㈯
「明治期文明論に読む社会の発展･人間の発達」
　　樋野芳雄
　　（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）

〈後期〉愛知大学車道校舎
〈時間〉14:30～16:30

2006年
⑥ ９月16日㈯
「サン・テグジュペリの『星の王子さま』の
　　日・韓翻訳事情」
　　田川光照（愛知大学経営学部教授）
⑦10月７日㈯
「呪術戦争：15世紀タイにおける神々と戦争」
　　加納　寛
　　（愛知大学国際コミュニケーション学部助教授）
⑧11月４日㈯
「英和辞典の歴史」
　　早川　勇（愛知大学経済学部教授）
⑨12月２日㈯
「＜子供の言語獲得＞トマセロの「言語構築」
　論を紹介する（シリーズ第１回）
　―その基本姿勢から単語学習まで―」
　　伊藤忠夫（中京大学教養部教授）

2007年
⑩１月13日㈯
「（未定）」
　　陶山信男（愛知大学名誉教授）

外国語検定試験奨励金について

語学教育研究室では外国語検定試験合格者に奨励金（図書カード）を贈る自主学習支援の制度を設けています。2005年度は延べ93名の学生に奨励金が贈られました。

2006年度も下記により受付しますので合格者は申し出てください。

記

１．対象学生
愛知大学豊橋校舎　学部及び短大の学生（大学院生、オープンカレッジ生、科目等履修生、研究生は除く。）

２．奨励基準
追って教務課及びLL自習室の掲示板に示します。

３．受付期間
2007年１月15日(月)～１月31日(水)

４．手　　続
学生証及び合格通知書を３号館LL自習室カウンターまで持参し、申請して下さい。

５．奨励の対象
2006年２月～2007年１月の間に合格した検定試験で、同一言語は１試験のみです。

６．その他
TOFFL、TOEICで対象外の試験がありますので、掲示で確認して下さい。

LL自習室を利用しよう！

ビデオ、ＤＶＤ、ＣＤ、雑誌、図書など語学自習用資料をたくさん備えていますので、あなたの学習に役立つことがいっぱいです。

ぜひ、LL自習室を活用してください。

場所：３号館１Ｆ
時間：講義期間中は　月～土　9:10～21:30
　　（日・祝日、夏期・冬期休業日、
　　本学創立記念日は閉室）